

「心の贅沢」か「欲望のジャングル」か？

「昨今のガーデニングブームに寄せて」

私は東京といっても比較的郊外に住んでいるので、会社への行き帰りにきれいに植え付けられた庭をよく見かける。昔ながらの和風庭園もあれば、コニファーという西洋の針葉樹を巧みに配置したガーデンも多い。

そういえば最近テレビや雑誌などで「ガーデニング」という言葉をよく耳にするようになった。英国式庭園のスタイルを指すのだそうだが、都心の主婦などを中心としてかなり広範囲に取り組まれているようである。

しかし要は「園芸」という昔から親しまれてきた樹木の栽培・管理の事だろう。土を耕し、根を張らせ、枝葉を繁らせる非常に根気のいる作業の総称なのだ。

しかし最近は流行というべきか、ブームに乗せられて、なまじっかな知識しか持ち合わせていないような人が本当に多い。種を蒔けば、苗を植えれば、それこそ「自然に」庭が・ベランダがお花畑に変身するかのよう夢想する、幸せな「にわかガーデナー」諸氏が急増しているのだ。

しかし緑化ブームと言われるからには、それなりの根拠があるというものだ。近年では物質的とも言える都市化の中で、私たちの物質的な豊かさの対極に精神的な貧しさが同居しているなどと嘆く社会学者は結構多い。

ニューヨークの孤独なスナイパー「レオン」がこよなく愛したのが鉢植えの観葉植物だったというのは、なんとも悲哀に満ちた話であるが、心の癒しを求めて、庭やベランダを緑で埋め尽くす人は結構多いのではないだろうか。

片や同じく都市化の進展の中で「ヒートアイランド化」が指摘されてもいる。これはエネルギーの高密度での消費と、地表のアスファルトなどでの被覆のため、日射熱で温度上昇が起ころうもので、専門家によるとこの百二十年の間に平均気温が2℃も上がっているのだという。近代文明による地球温暖化の典型と言えるだろう。

そのため「都市緑化」が最近声高に叫ばれるようになった。高層建築物の屋上庭園や幹線道路の街路樹などがその例だが、かなり意識的に行われるようになってきてはいるものの、無機質な高層建築と緑のコントラストはやはりミスマッチという以外ない。

私は職業柄、普段緑に接する機会が多いのだが、現実のブームに比して実際の自然環境への効用については、おおいに疑問を感じている。

循環型社会への理念と現実という訳ではないが、エネルギー循環型のライフサイクルを実現するにはコスト面の障害を今後クリアーしていかなければならないだろう。

そんな中で、趣味としてのガーデニングが一過性の流行に終わることなく、人間と自然の共生に繋がる希望になることを願わずにはいられないものだ。

1、樹木は鑑賞されるものか？

先日わが職場で行われた農業祭のことだ。私たち職員が、週末の休みを返上して催されるこのお祭りには、毎年恒例として樹木の即売が行われる。そこで木を購入したお客から、後日「お宅で買った山帽子もう枯れちゃったわよ。」という電話が掛かってきた。

「またか…」という思いがよぎる。

山帽子というのは元々山地に自生するみずき科の落葉高木で、白い花が色鮮やかなことで特に街路樹として人気の高い樹木である。実際その家に行って木を見てみると、確かに先端部分の葉が茶色く変色している。「やはり枯れていますね。」やり場のない虚しさを感じる瞬間だ。

しかしそれにも増して気になったのは、その山帽子の根本付近の土の乾き具合であった。

ふつつ樹木を移植などしたりする際には、「根巻き」という処置を施す。根っこに土を付けた状態で藁やジュート布などでくるんでやるのだ。こうしておけば多少の間、地表に出しておいても枯れることはない。

もちろん今回の山帽子にしても根巻きはちゃんとされていた。しかし植え込みの際に十分な水分を与えなかったのか、そのあとの灌水が悪いのかその客の庭はカラカラである。

人間だって脱水状態になれば元気が無くなってしまふのはあたりまえで、植物にしたって例外ではない。

要するにこのお客はせっかく買った植木に水も与えなかったのだ。樹木を只の観賞用の「オブジェ」とでも思っているのではないのか。そう思うとなんともいたたまれない思いで一杯になる。

まあこれは一例だが、普段私たちは、何気なく「モノ」としての植物に接しているので、生き物としての彼らの存在には、つい無関心になりやすいものだ。

ある清涼飲料水のCMに使われた、高さ十メートル余りのけやきの木は、撮影スタジオ入りするまえに根を切れ、幹を空洞にされてしまったのだという。運搬に支障をきたすという理由からだ。

CMでは、少女達が木陰で涼みながら、その清涼飲料水を飲むのだが、私はその演出をするためだけに何十年もかけて育てた木を無造作に使われる生産者の心境を察していた。しかし予想に反してその生産者は、「何十万円で売れた」とか、「テレビに映って良かった」だとか言っていて、私は他人事ながら非常に腹立たしかった。

柳宗民氏は『園芸は愉しい』という著書の中で、「私たちが栽培植物から受ける恩恵ははかりしれない。そして、それらを育てるとき、栽培植物は、その命をすべて栽培する人に委ねていることになる。」と述べている。植物といえども私たちは生命を預かっているということを忘れてはいけないと思う。

「所詮は観賞用の植物だから」というのは、その生産者の言葉であるが、このような発想にこそ自然環境との調和を乱す以外ない、人間中心主義が見え隠れしている。

などと言いながら私もベランダでサボテンを育てている。なぜサボテンかというと、やはり手間が掛からないからである。やっぱり人間って自分勝手なものだ…。

2、植物は環境次第

最近、環境ホルモン（内分泌攪乱物質）がマスコミ等で取りざたされている。「エストロゲン」類似作用のある化学物質の影響で、女性が乳ガンになったり、精子や卵巣、植物にとっても深刻な影響を及ぼしているのだという。

その中でも一番問題なのは土壤汚染で、農薬や化学肥料の大量投与に加え、ゴミ焼却場から出るダイオキシンが土壤を覆い、農作物を汚染してしまうのだ。

そういえば、以前私は農薬使用の是非について投稿したことがあるのだが、当時とは若干意見を改めたので、最近の実例と併せて紹介したい。

先日仕事で、都内で開かれた環境緑化に関する展示会を、視察しに行った時のことである。あるブースで「地球の声」という小冊子を配布していた。「日本は高度経済成長時代に経済発展し続けてきました。この経済発展の影でどれだけ美しい地球が犠牲になってきたかわかりません。」と言う書き出しに始まり、CO₂による地球温暖化や、環境ホルモンの問題にも言及されていて、企業がここまで問題意識を持って環境問題に取り組めば、社会も変わるのかな、などと感心していた。ところが巻末に「大気の中にはダイオキシンが一杯、だからダイオキシン分解還元シャツを着て健康になろう。」なんて、いかがわしい広告なんか載っていて、図らずもエコビジネスならぬエゴビジネスの現実を知ることになった。まあ企画が企画だけに、予想はしていたものの、企業の商魂たくましさには驚かされる。

私の勤める職場でも毎朝、某農薬メーカーより注文依頼の電話がかかる。「今月はノルマがあるんで…」とまತ್ತたくうざったい。

とはいっても、お客から注文されれば、こちらでも調達しないわけにはいかず、ついつい注文を出してしまう。こういう態度が農薬を氾濫させ、消費者を農薬依存にしているのかも知れない。自戒・反省するついでに、農薬依存の実態について少し調べてみた。

通産省が九七年に委託調査した、「内分泌系（エンドクリン）に作用する化学物質に関する調査報告」によると、内分泌攪乱物質として確認されている農薬は現在六十種以上、いままで発ガン性、催奇形性や生殖毒性を指摘されてきた農薬ばかりである。

なかでも、十年以上前に農薬取締法で販売禁止になった、DDTやBHCといった有機塩素系農薬は、農水省のさまざまな埋設処理のため、現在でも被ばく被害がおきている。

このように環境負荷において、著しい影響を及ぼす農薬が、なぜ使い続けられなければならないのかといえば、一つには売り手としての企業のエゴイズムがあり、もう一つには買い手の側の農薬依存の体質がある。有機栽培などの無農薬では決して市場に流通できないシステムになっていることに、根本的な問題があるのだと思う。

それはともあれ、一般的にも化学肥料や農薬信仰の傾向は強い。

何の経験もない奥様が、少しの手間を惜しんで除草剤を使う事自体も問題だが、希釈倍率を無視した濃度で撒けば、庭の緑はオール・オア・ナッシングになってしまう。また化学肥料のやりすぎで、栄養過多になった草花が根腐れを起こしたという例もある。

アメリカの大規模経営された農場では、飛行機による農薬の空中散布が行われていて、被ばく被害やポストハーベストによる残留農薬の問題も取り沙汰されているが、これは医療現場での薬漬け医療の実態と何ら変わる

ところがない。

メーカーと消費者のもたれ合いの構図が、土壤汚染を深刻にし、環境を蝕んでいるのだと思うと、売り手として責任の一端をひしひしと感じてしまう…。

3、欲望のジャングルを超えて

先日テレビで「ガーデニング対決」と題して、プロのガーデナーによる作庭のコンテストが放映されていた。色とりどりの木々や花をふんだんに使い、玄関先や庭を装飾する手際の良さや、飾り付けのセンスの良さが勝負の勝敗を決めるのだ。

たしか最後の決勝だったと思うが、デパートの屋上に空中庭園を作るということで、各ガーデナーにも気合いがこもっていたのだが、ビニールシートを敷いただけの場所が見るうちにメルヘンの舞台ができあがるダイナミズムはとても見事だった。

しかし同時に百万円以上掛けて創作されたその舞台は、ただ人々の一時の視線を潤すだけの「欲望のジャングル」になっているんじゃないかという気がした。

見栄えが良いに越したことはないが、生まれも育ちも違う花々のコントラストはどこか馴染めないし、自然な感じがしない。なによりデパートの屋上というのが頂けない。

日本には昔から「侘び、寂」という文化がある。閑居を静かに味わったり、古びて趣のある佇まいを好む風習であるが、京都に行って古寺などにいくと、なんとなくイメージできるかもしれない。

それに比べてガーデニングというのは、イギリス宮廷の格式ある伝統が象徴されている。中央に館を望み、放射線状に庭が造られているのだが、遠近法で作図されているため、ひどく直線的な趣である。

いわば西洋文化に対する東洋文化という図式であろうか。だからどちらが良いとは言えないし、最近ではハイブリットな和洋折衷の作庭も増えてきているから、今後は境界線も無くなっていくのだろう。

しかし大切なのは、私たちが庭に、そしてペランダの樹にどれだけの愛着を持って接することができるのかということだ。木々と接し、環境のことに想いを馳せるなかで自分を再確認することもまたできるのではないだろうか。

都会の喧騒は、人々の疲れ切った心を潤してくれることはない。「癒し」というのは自然を欲する人間の、自然な要求なのだろう。アロマテラピーやガーデニングはその一端で、本質的には地球環境の保護へと問題は引き継がれていく。

私もそろそろ水をあげよう。もう半月もほうっておいたサボテンに…。